

なり合って死んでいました。どんなにお腹がすいていたか、どんなに淋しかったか、今の若者達に聞かせなければ、見せてあげねばと思います。私は今では一粒の食物も決して粗末にすることはできません。引き揚げて来ても決して棄ててはありませんでした。しかし、今は三人の子と六人の孫に囲まれて幸せな毎日を送っています。中国から残留者の人達が来日するたびにテレビの前で泣きながら見ております。ご両親に逢えなくても、せめて親戚の方でも逢っていたらいいと願っております。親と離れ他国で他人に育てられどんなに淋しかったか、内地へ帰れたかったか、中国で暮らした者でなければわかりません。中国で亡くなった友人達の供養をしてやりたい一心で、四国八十八か所、西国、阪東、秩父と観音様の巡礼も主人と二人で昨年まで一めぐりすることができました。

佳木斯から遠い山形への旅路

山形県 村岡 俊子

内地で教員をしていた夫が、昭和十六年に満州国三江省・県公署教育課視学として赴任したのは、当時の国策に沿って大陸に羽ばたこうという志を実行したからであつた。

翌年春には私も一子を連れて海を渡つた。

十八年から省の中心地チャムス市の樺川県官舎に住んだ。収入は、ゆうに、内地の二、三倍はあつたらうか。

「五族協和」を唱えながら日本は支配国。配給品には特配もついた。

二十年頃から官舎内の主に召集令状が届くようになって留守家族が増え、夫は食料増産監督のため一か月間も出張が続いたり、戦争の影は徐々に忍び寄っていたのに、知らぬまま不安も抱かずになっていた私であつた。夫三十五歳、私三十歳、長男小一、長女二歳。悲劇の始まる八

月当時の我が家族である。

以下は全くの拾い書きになるが

八月九日。ソ連参戦、巷は騒然。関東軍は。

八月十日。夫が牡丹江に召集。根こそぎ動員。

七月半ばから私は二人の子を預けて入院中で、開腹手術の傷はまだふさがっていないが、応召と避難命令のために即刻退院した。

十二日以後。二子を連れてチャムスから退避。身一つ、手荷物一つ。他はすべて捨て去る。

軍の姿はまったく消え、無秩序の中、女子供だけの泥中逃避行が始まる。連夜襲った豪雨は、まれに走る無蓋車の人々にも山道をたどる難民にも容赦しない。圧死、溺死、置き去り、行方不明と、数えきれない悲劇が起きる。とり残されれば死が待つのみ。

十五日。緩化着。敗戦を知る。病人として初めは病院、後日飛行場格納庫に暮らす。伝染病が流行。死者続出流。言葉も多い。

九月。南下列車が動き始めた。行き先も知らされぬ列車に動物のように詰め込まれ、四日かかって長春着。収

容所、満鉄官舎の棟4戸に県公署一団がうごめきあう。屋根があるだけの幸せの中で、連れてきた子供らが、この夜から堰を切ったように死んでいく。わが子にも手をたばねて見守るだけ。軍務解除された男子職員がやがて長春を捜し当ててくれ、夫もその一人。長女は父と目をかわしたが口も利けず、数日後には死んだ。不当な死、二歳三か月のわが子は父母の手で広野に葬られた十月二日か。

冬から春へ。所持金は底をつきめいめいが日銭稼ぎ、しがない立ち売りの身となる。発疹チフスが全員を襲ったのはこの頃だろう。時計も、記録をしたい一枚の紙もない。ソ連兵さえ難民街を恐れたそう。重症だったわが家族は三人とも生き伸びたが、またも無財産に陥った。国府軍、バロー軍の内戦にも巻き込まれ、祖国のない民の悲しさに泣き、棄民の身の上を恨んだ十か月。

そして七月。難民から先に引き揚げが開始された。一時は百人もいたわが一団は、数人の子供と半減した大人との、生き残りわずかに四十数人となって千早町を出発した。持ち帰り金は一人千円と許可されても、私達はそ

れさえ満たせず、コロ島へは体だけで。集結した無数の難民がLSTに詰め込まれた。が、死神は上陸の朝まで付きまとうのだった。

二十一年七月三十一日に博多の土を踏み、ふるさと山形に向かう。長女のかたみは一握りの異国の土。乞食さながらの風体で帰宅。

縁者からの、ゆえのない仕打ちにも耐えて前途に立ち向かったのは、敗戦の異国で培った困難に立ち向かう根性だった。そう思うほかはない冷たい祖国でありふるさとであった。

その秋から夫が、翌春から私が教職に復帰して自立し、国の復興と歩調を合わせるようにしてわが家庭は整っていった。引き揚げ時の無理がたたって、長く健康を取り戻せなかった私は、間もなく退職して、久しく希望していたピアノの教室を開いて現在に至っている。

思えば、決して平坦ではない人生を歩んだが、共に帰った長男の家族が増えて、現在は平和な六人暮らしである。

△追記▽

今年も八月が来て去っていった。一家にとって亡き子を悼む心は、年毎に増すことはあっても軽くなっていくことはない。子にただただ詫びるばかりの重い夏である。

綏化までの私は、二歳の幼女にとってアシユラとも見えたのではないか。七歳になったばかりの長男に、体力以上の荷物を持たせはしなかったか。病人だった私が彼等に強いた八月十二日以後を、私はいつも悔やむ。

八月十日夜に出征した夫の心中をも思いやる。まだ動けぬ妻に二人の子を託し、長男に遺言し、有り金を出来るだけ残して家を出ていった夫。耳をすましても靴音はすぐに消えた。あれは暗い雨の夜だった……。

それから体にむち打った不眠の二夜も現地人に襲われる恐れと歩けなかった駅までの長い道のりも、到底忘れられるものではない。

だれもが自分を守るのに精一杯の折に天の恵みを受けた。泣く力もない長女を背負ってくれた人、歩行に悩む私を病院に伴ってくれた人、軍医が一人残っていてくれた、など、神の守りは確かに家族三人の上にあった。

牡丹江からハルビンへ長春へ、長い道のりをたどって探してくれた夫は、かわいがった長女の死に目に間に合いい、その手で葬った。「幸運」の二文字だけでは片付けられぬ幸せ、必死になって生き延びえたのも、夫の支えがあったのことでなかったかと強く思う。さらに、収容所で団結した月日も加えて。

帰郷後の再建の一つに長男を生かさそうと努めたことを書き添える。異国で苦勞を共にしたわが子（帰国一団で最低年齢）は、私達には掛け替えの無い一人っ子なのであった。

惨たんたる大陸の終焉

山形県 阿部 恵 一

海外移住の動機と家族の状況

海外への勇飛。当時の疲弊しかった東北の農山村に住む子弟にとっては、国策にそった開かれた道であった。

その頃、在満の工鉱業系の大企業が投資して満州の工鉱

業現場における中堅技術者を養成する学校が酒田市にもあった。

その三年間の教育を経た私は昭和十八年三月勇躍渡満。四平街の陸軍燃料廠に就職した。母は既にその街に移住しておった。（妹は内地の高等女学校に在学中、昭和二十年四月渡満）

終戦前後と、在外財産と、心身すら喪失した生活の激変。

昭和二十年八月九日、早曉、ソ連軍が、ソ満国境の各方面から怒濤のように満州へ侵攻してきて未曾有の大混乱に陥った。

その前、八月一日、私は現役の初年兵として、そのまま四平陸軍燃料廠に航技二等兵として入隊しておった。八月十五日の終戦の詔勅のラジオ放送は全員部隊の広場に呼集されて聞いた。

盟邦ドイツから輸入した航空燃料の製造設備の接収を恐れた部隊は私達十人の初年兵に白無垢の上衣を着せて施設破壊の決死隊員とさせた。それは不発に終わった。

母と別れの水盃を汲みかわしたことは、今なお鮮明